うなゐ舟

四編

下

特
へ遠13
841
12

遠13
門へ
雑841
巻12

明治二十八年
十月十八日
購求

春色梅美婦禰巻之十二

江戸　爲永春水著

第九三回

再説お染ゴ家出シテ行衛知レズ知レバ柳川亭の母もお京ゴ方あそこも峯次郎の父母知ラザルまでど彼此と問ふて周章強ぎーゴ騒る幕ホうりても多ク峯次郎ハ家ヨリ元屋敷後ゴ両方の母も思ひ相の尽るかどわきれて峯次郎のゴ母ハ先キ一番只お染の行衛をのゴ案じ

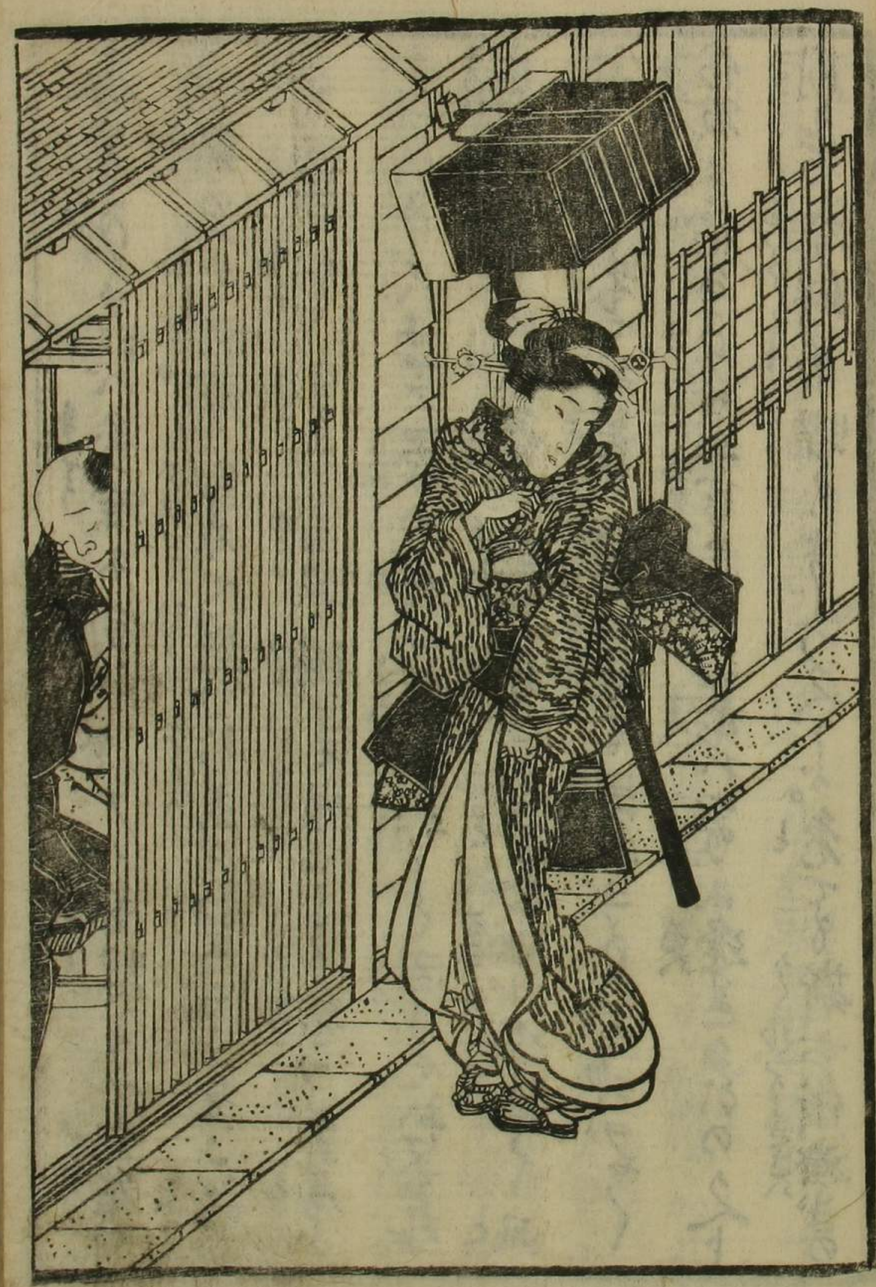
入て黄昏ハ何も乱れ／＼涙ハのこ／＼暮けるがお桑の
家出しる四日目の朔日／＼公易くせ／＼撞蔵人萬蝶が
柳川亭の門口ゟ爺「ヲヤ／＼大変ハ朔日ばかりゞゝ
お客が来て休む時分ゞのハお見世も明るひでトいふを
関分て爺ゟ出るお桑の母「ヲヤ萬蝶さんお早ひね
爺「ナニ／＼些も早くもサ。什須お桑さんの寝ばかりハ母
さんまで引ぱり込まて朔日遅くおうん成ものゞサア／＼
お桑さんお起成爺蝶が急用ばかりまた。アヽ／＼苦
遅ひ／＼ト例のお様の元気よく座敷へ上ル爺「ヲヤ／＼
中のゟでゟく爺でゟ／＼お桑さんハ二階へお寝眠ひ
ものゞ生ひたぐゞアヽ／＼母「アレサ爺蝶さんお桑ハ
寝てハ居るひハよト言ばゞ眼ハ涙を浮やしゝ爺蝶ハ
早くも見とも爺「ヲヤ母さん涙ぐんでお在るさるよ
何様ゟ成ものゝ人ちゝとお桑さんハ／＼何所へお出のゞ
おぎるまた母「ナニサ何所とりハ當ばあるとゞ寝ばかりゝ
けまども些も行さ先ハ初まるひゟ／＼私ハ黄昏ハ

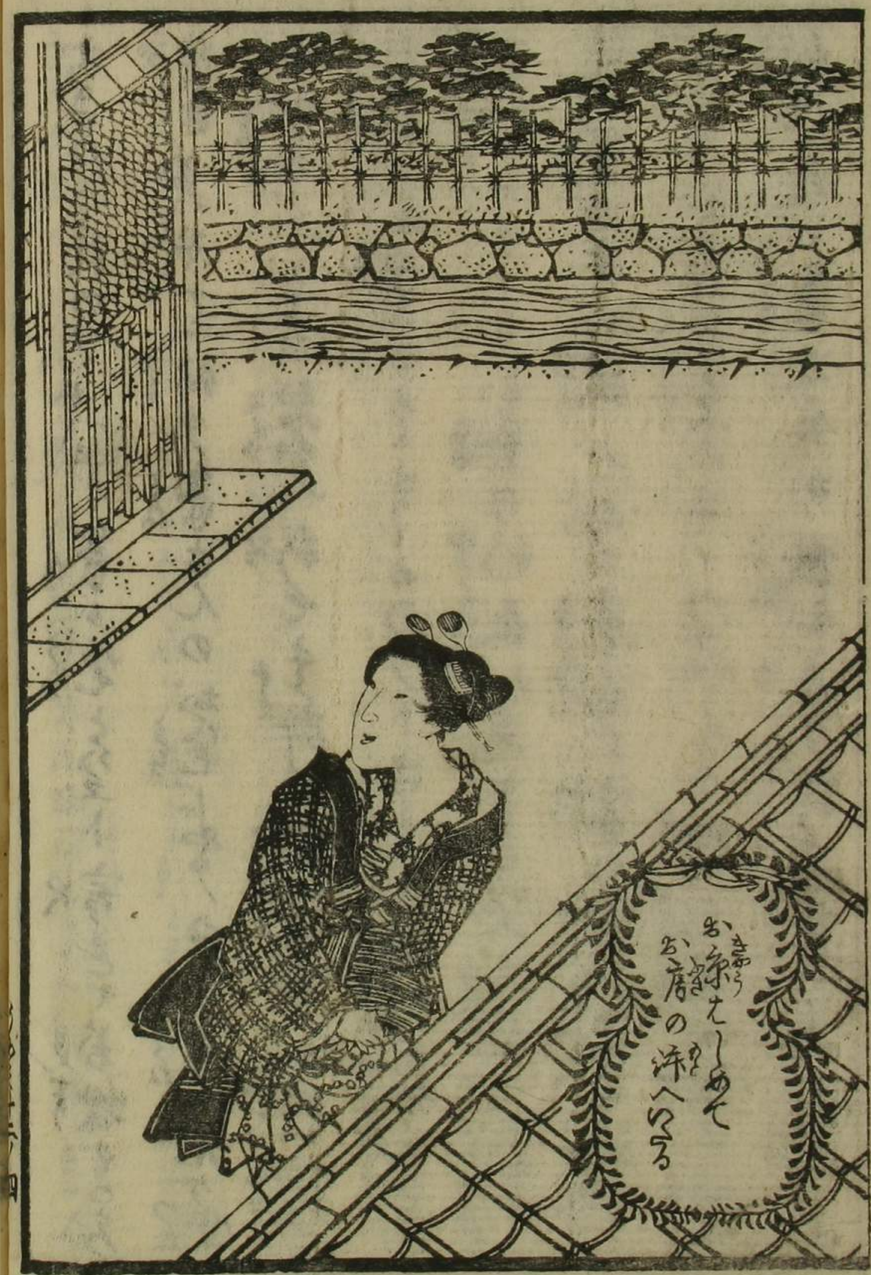
ゐ川て疾ぐ痛んでゐふるひの中　爺「エヽ実に公のうのうな
母「ナニ空を仕ものうな今月で丁度四月目になるけれどもゆ
ちも使ふぶ気ひのごろう海川へでも這入ふるまひるを
可憐ちゐでゐふゐトいふ墨ぶりて涙の声音さもぐれ
爺蝶も元気をうゐひ母の側へ腰の後ろる振よ動止
ざ一七　爺「イヤ主人ハアア大変なすぐ出来さる工合振いふ
ろて於条女ぐ手振を気ふゐりさのでぐるまろ合
でも深ひ理言のゐるて　ぐるまぶりが私も今うぐ

不及ぶ　爺「寄れば出て上振ぐゆーしもゆめうりハゐひの久
トいふ母ハお条の書置爺蝶が出ーて着せる　爺「見ぐる
鎌倉の尼寺の方へ　母「彩もゐひといふ途方の暮
へまゆ振ぐ仕振ハあるまひろ考へてお呉ナ　爺「ハテ困ふる
ものごゆ振も外の期といふ　母「ハイ恵ハゐひぐ山上の見非在
家を探ーて見ゐふ飯縄権現さゐの法を願ふのごまト
見ーとう爺蝶ハ飯縄の古利益を委ーく振るゆふ母ハ
命も代りうく思ふ条ゐのゐれば亦手相法を及ーぐ

母ハ三ノ分ホシトモ義次郎ガ此ニモ家門ヘ倚角ガホ
ノ所ヘ行テ拝んで居ラウト吐家ヘモ十日の晩も泊を
出さるひラウお家も寄デて居る家中実家のお京ガ
義次郎の母と同伴ホ来て吐方ホだラウ義ガ居る様ホ
思ハレて恨ミを言さものごラウお家も気を紛ハしテ吐猿ル
ものホ用さのごラウ用ラハお京ハ義次郎ホ外でお逢の
まくハラウこと久 義ハ十二ちやア逢ましとも実ハ跳歩義
きんの所ヘ止宿て夫ラウお家さんホ用ガあリて来さので

おざカまたのサ 母ハエイ義ガ宅とハエト言まで茶蝶もちろ
分き 義ハヲ十二 分サ義さんのお宅ドやア多ひ義さんガ常
ホ分ラ易く さるお家ヘ行テ来所ホ義さんガお在成て
ラウ私ガお同ホラウとまーさのサトさとガホ物ハ刑て姫さ
茶蝶ものもども お京の行先知ま どといハ大変ホ驚ル
ル義次郎の張しテわる事の家のラウ成 故ハと言ホ
たラウラウ自ブ言葉のさーつくーラウ母ハ元来お房のラウヘ
公ちラウね ど義次郎の 故ハ居る所ガ在ラウんと赤ーー




おゑたしあて
お房の洗へらる

居るゆゑ釜蝶ハ向ひ　母アノ釜蝶さん　伊藤で
毛ノ勢の大盛ぎが出来て娘の行末ぐ知れるゝ程の
ゆゑ　伊も角も宮早限して物をもる程ハ居ら
きゆひゆゑ　アア嵩の居る所を委しく聞せてお呉れな
さい　出来ぎハお桑の家ハ居るゆを出してたゝく此
家へ連て来てお呉チ　釜伊藤も聞こゆゑ　母ヲヤ
伊殿　手紙ハ嵩ハ家ハ逢まゝの人ト
聞まて贅時釜蝶もさうゝ人しゃ。老ても斯ち備強ぎの

出来ぎ上ハ伊ゆも賜をゆ程もゆ程を思ふ素を極め釜
実ハお嵩さん明ハ出こゆひゆゑけまとも伊藤でおれ
ぎゆも海を見ましゆ　さゝくゝてのおゆも大変ハ
苦労せして浜でお在ぎゆ　夫で私ぐ今月此方へ来ハして
来さのぎゆ　母ヲヤお嵩の伊をお言ひのゑ立てのゆ
只　誰人のゆゑ　釜十廿　房吉さんのゆてぎゆまに
ア　母ヲヤ　お桑のゆ　お房ぐ聞て浜て居ると人の
久　釜ナニ伊藤　七年程ゆを彼地で市藤ハの子ハ

ありやせん私も今此所へ来てお同中さのごりのう母へ
本三郎ごらふねへ支ゆしたハ分級お房が泣て苦しがりて
居るのごらのよ 弟へさきばサ家法弟さんが腫物が出来て
十日わど 絶食同様でころくさるを 命ゆうくを医師が
いふくう養さんの苦しむのを見て 房吉さんハ泣ぐく
看病して居る成ー 亦分級家さんぶくといふても
実家へ久しくお帰ん 成る中ゆ出来の大病ごろう
きーつくる支もあり 房吉さん一人で看病も出来ぎ

弟一のうすがあれと弟 諸方へ知らせぎゆ 来てハ涙ぎ
お医師さゆ治り 来るといふふ 千ゝ所で早くお茶さんを
お呼中度といふ 伝サト同て そいふくく母親亦一場の
苦労の一件 果まて 羽もうふ しが母へ分級しまて家
治弟が不快 ふくとのつて お房の宅へ行て 家ゝ付さん
だまへ 弟へ十二サ 病気が発つて ふくく 房吉さんの所へお出
成ゝのでハ ふーサ 房吉さんの宅ゆ 実情でお在成て
数中ゆ病ゝ出して ふゝ病ゝ おふく 成まゝこのごろ

大変ナ　母ハヲヤ〳〵そなたじやア　峯次郎ハ辰己へ行て始終
お房の所へだり居さうなエ　爺ハそれでござるまをう
母ハイヤハヤ　第まさまどもゞノウ　他様よ同じても　親達ゞ
面目なへこけごト　海鼠を仕さうなり
　　見よう　爺蝶ハお房と　峯次郎の　深き中なるこを
　　ちゞる　姉妹の　心〳〵ゆそ　お条の義理合　房吉の三角
　　づくのうまを　妻〳〵　仕て　相撲に及びける
　　○　久兵や　只　財ケ　るみ　孤の　両　春泉

新る　緯のありぞ　ものふねゞ　お京ハ　発明ゆて　峯次郎の
行方をさぐり　尋出さゞ　お条の行方も　男ひの外ハ知れる
るもものこと　彼婦多川　るお房を尋て　対面ー　見ハ
同　大方ハ　居所も　知るこけとなるべー　亦然るく　見
お条の家　出せー　るを　姉　お房ハ　先　その子　なる
も　同じ　ちゞを　公分　しゆ　母の　系ハ　内〳〵　あてもの　外を
告　彼婦多川の　枝本　彦ハ　陳　居ー　父の　所へ　行　あも
ひきあそ　女と　小僧を　連て　家を　立出　婦多川ハ　のこり

きぶ下女と申俗なれば父の所へ待せ置父母に頼て只一人
和泉町なる房吉の所へやうゝと尋ねて参るゝ
けるに此第八家内に病人ありて見板をも引て居るゆ
えに先お房の門口に寄かゝ内の板戸を伺へば
アレサ嬢さん気をつけてお呉よヨウ嬢さん
そんな苦しい。アレ位病せうのう。サテ此お薬を
お上りヨト 泣声のそのお房の声嬢さんと泣声を
聞て おとゝ思ふ胸 男ゝぶと表の格子を開内

もゆくガラリと引明け中妻居の漆戸を明京ゝ西
見成まゝお房さんのお家へ計宅でおざるまいかト
いとどお房八嬢第の病こげゝく苦悩て 苦
労り苦渡をも変へ程なれば お京ゝとも父母
入口の方を見向もせぬ きへお咲さんおつよさんの
ひが手渡アノ茶碗へ水を汲でお呉成ヨアレサ嬢
さん引ト呼ぶ八嬢第ゝ気をつけるひる体と看
ゆるゆえ お上ふ たづねて来ゝ家ゝまで来ゝて居る

新しあらねば長所の方へ走り行き茶碗を拾ーて水汲
峯次郎の家の側へ持ちましをお房ハ清水口ゆくと
峯次郎の顔へ水を吹ッけ注声めて「峯さん〳〵
峯〳〵ヲイ〳〵案じなさんな 京へ峯次郎さんあるが好き
まーこと久ートいふ第峯次郎ハ少し眼を開き四辺を見
まわし峯〳〵ヤお吉ハ何時のろみ来たのぞ 京へアノ呂今
参りましたョ未お房さんハ夜明ケ いまーまんショト
言ふまでお房ハ怒りー「ヤ私ハ嫌ッ」お隣のお咲さん

だと思ひて居りましたョお京さんでどざりまーこと真平御免
成まーョ。アリー姉ちゃ峯一とれ浪ふお成ちゃ私ハ峯
行張せうと思ひましたョ京へ私も表へ這入ッぢらお峯
さんが泣ちゃで峯さん〳〵とお呼びのを聞まーこと
胸ダドキリとして峯次郎ものさまど御完へ這入りまー
こと堪兵して下まー「イエ行張いまして私ハまこと
遅ッて美中の極よりまーこと峯さんぢらお濱の
お内義さんぢら知ませんこと言ふ恵様よ水を汲でおいた成

えんぞくおまひ立やまし〳〵こゝハ内竟歳まーヨトまふ御く
義理合を述る中ふる家内家ふ分を分て人抱へ勝り
劣らぬ両女の実意ゆ〳〵弟ハ書ふ〳〵彼是
まる間ふ家居帝の苦痛も思ひの外ふ治り〳〵放お房へ
あんど安堵〳〵とあ〳〵ハ文じやア坐ふ放〳〵まひヨ拵角
お京さんゞ始て お出成と のゞふ 京〳〵イエモウ坐ふ お稽
古まるまひチ 私へ辻番る京〳〵存ませぬ お祝ふ是非
お見ふゝらるひけまゞ ゆゝが出来まし〳〵ふゝふ

泰ふこのでおざるまひヨ 家〳〵伝故毎人さんが行とゞ 言ふさ
のゝ 京〳〵イエナニ然ゞハおざるませんヨ 私ゞ内密でお房様の
お世しゞ有りて泰ふこのでおざるまひふゝふ お泰さんハアもゞ
お脳成まひチ 赤ん病ゞふるゝふると 行ませんヨト
言るゞふ お房の側へ近付て 声をひそめ 京〳〵アノもお房さん
お泰さんも家さんのゝでゝ気をもんでお在の中ごゝふ御世
ヤそハ悪いけまゞも 捨て泰ふ 泰ふ来
どゞ成ゞ 言ハ ヨヤ 行でおざるまひふ

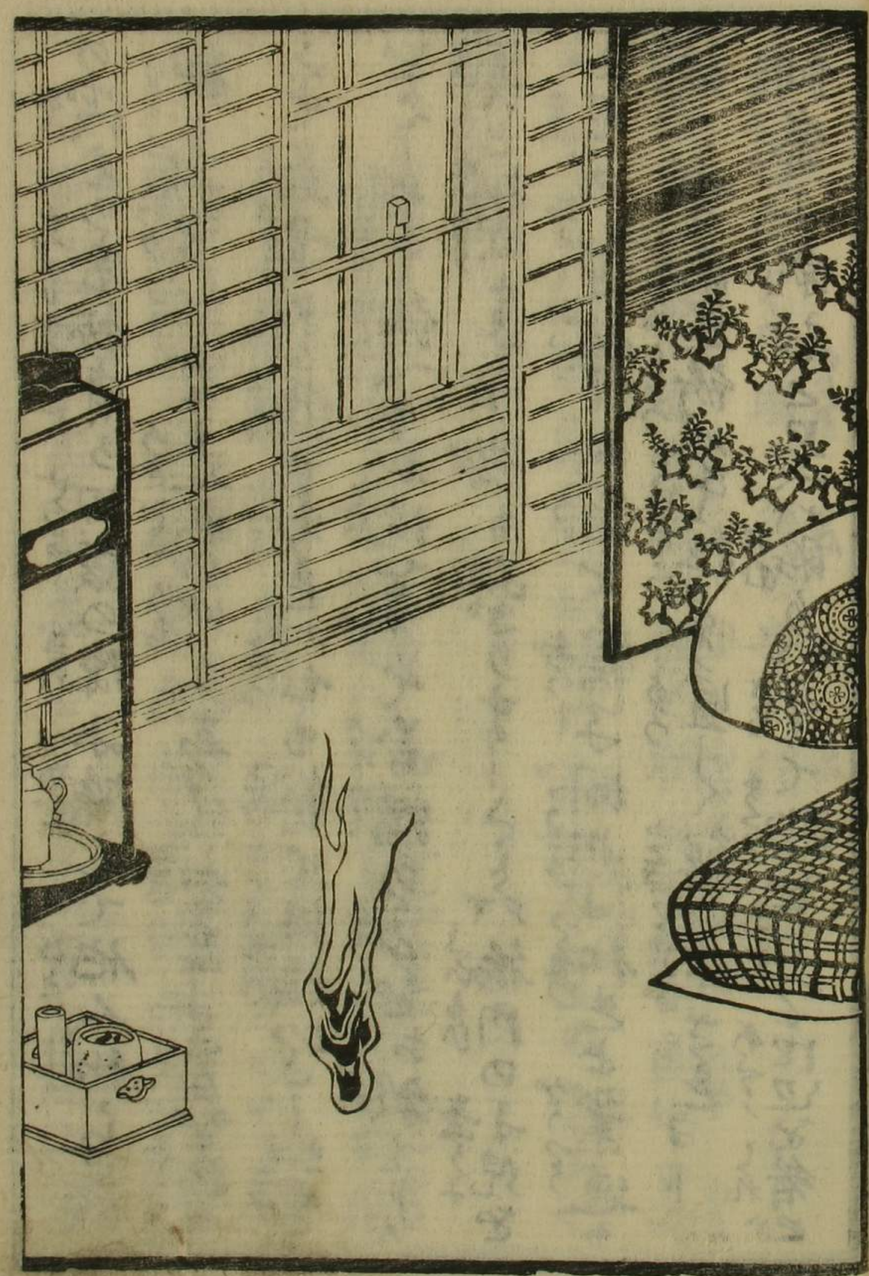
けゞ須八崇さんの病気みとう絲まで行るも外のるハ知
ませんヨ京へイエ他のるそハどざるませんゞよト見ようと
声を低くしてお発が遺出せして家を出ゝ始まを委く
物語れバさまをゞ姉妹のるゆゑたるを同中ハお房ハ泣て
裏ゝ眼るハ涙をうるもつく顔ゝ変うて涙伏ける
お高ハとふ崇次郎がお房と情合のあるを始て
知りて驚けども嫉妬の心ハ更に発ゝどるを細やるハ
強合ける

第北四回

ふ赤猴寺の地内ハ仮住居せゝ判次郎ハ彼お園の夫
ざ出ゝ七郎ゝ一件ハそ終彼是と相談して眠りもやらぎ
在けるゞ枕元なる方燈の明るく点るゝ消んと
ハ赤明るく表風の青ゝ行とゝく物ものゝ聞ゆる
折ゝもあまゝ陸ハ知らぎ枕元へ来るものあり
時判次郎ハ物音聞きて動るゝ呼ぶ日暮ゝ異変覚へ
ゞ脱ものるもの枕元ハ座して「サテ手拭ハ

面會に及びまゐらが縁わりて不便ゝ思ひ召れ下お園が
父也小佛善左衛門と申者此素とるゝお園を お見捨被
ね様よこぞく今晩お頼ゝ申ふ或まゝ程のうまく
先別堀下の茶屋へ推参いたしたお園へ不法を申かけ私
ゝくも嬢様の命にて拙者が深く思案も如何お園ふ
迷惑をうけ義中ふ手洗までを殺ぐせやうとうのうの
毒ふ毒ふ毒く ひがけいたして拙者ゞ死後の義を其方へ
お頼ゝ申さんと覚悟いたして居られど拙者が絶命の條

今日ふ迫の是非おく俄ふ出お紙ゝ申ハ其巨細ハ
最長ゝ書ふ記しの忠の勇猛強ふ混雑まゝ成る此死
の義ゝ久ゝ乞配いたし利害まて彼堤下へ此夜
中参りてお置ふ逢然をうけやうとする彼悪者ふ拙
者ゞ存生の中得と扱まゝ扱まゝ空てハ遠よ武家の
恥と存知て家内をべ去ます と思案を決し覚
頭をヤうけ退出ゝまゝるハ拙者と倶ふ命を捨
させやうとの思ひと深き所存の在ぞとハ知覚りさぬ女



善左エ門聖を現
判二郎に遺言せ

の淺ましう恥拙者う切腹の除ふ除んで他人知らざ
親元へ無ハしる迷惑の中よりまるゝ亟すゝるを後日
めて最業めが濟まぬ時べも解て後悔いて家
とたゝめ千俵へもお絶をやて第湯のうをお報こやス
義と相成まをう然もおぎりまゝ孤閉の小兒を
お屋のしと殺し お屋を室子同様よ仕き上業通ゆ
殺さふが不見所へ千俵より宜く解分下さきヨト
細寄ふ新むと見へバ眠りハ覚て拵を上つ巳刻を着ど

覚るの多くたれ曉の鐘の音の程をけまべコヲ〳〵と
陽の乳紋發し七告渡り頃て朝日の朗ふ閨中の両
戸へさ〳〵入て朝勤めの お経の声ハ本堂の方ゆて
聞えけり

偖こふ ちゝ〳〵るお園ハ小佛善ちうが以来浪
人と在し時 興ひ女ふ〳〵るお八重とのふ
腹ふ出生〳〵る娘うり未尚支の時 母と傳ふ縁と
切て大佛の家人 浮奉し父の家督を継けるゞ

父の死後ほいなくして年父が一味の者を語合
主君大佛の家を相續せんと巧みなる家督を
継で十余年をすぎて仕第ふりて御ふ顯られ
る様子なりんと志をひとりふ善をつふ若る
ものあるも一ツ次に身へおしもあるるれど
実の父が為も回悪つのもて逃るく乃ち元
来国家の重役なるべ切腹の覚悟を極めしが
身の為も悪るなるべ御ぞしたる孫を斷ハ
先祖への不孝なりせんて血脈を殘さんとるとなり
なるなるを思ひ出て音信を絶せ実ハお園をすと
なく尋ね出ー弟見世の様を買てとせ且女房
の里も斷絶したるしの死後ハお園と同居
させるべ種を産出るべお園の姉り舎弟ふして
角させんとたくふ〜るなり
判八コウ〜お園さん モウ貝を覚さるひら。已初ぎ〜
アイお屋敷の八郎ぴんハモウ帰りまーさる 判八エなぎと

いふのぢ　あへラヤ　私きやア　夢を見さのうるエ。アノウ今さの
旦那とりのハ　私の実の　父様ぢんぢを言て　妻しく　私ハ
るとて　弟のうを言て　問せて　今我　そ方の　所へ行さ女へ
義理ある　母ハあるのぢう　大うのハして　倉弟が　生れさバ
継母と　二人で　守をざて　先祖の　跡を立る　様よして
ぶろと　言まし　判　ハテナ　然して　此身の　現ハ
見えさのも　あへエイ　夫じやア　お糸さんも　分う　夫を　見の
久　判　然ばサ　なでも　お糸の　父様ぢんぢを言て　程くのうを

頼ム　様ぢであるさが　夢の　様ぢハ　あるうさうら　分の様も　不思議さ
るぢト言ぢうら　雨戸を　不残　くるを　明て　四辺を　片づけて
掃出さんとして　庫を　夫しうる　枕元の　方を　着れば　紙ハ
色ミ　小判二十両あり　小佛　善たつと　書分てあり　ハく
常ぢう　あるざまバ　判　次弟も　お園も　互ハ　顔を　見合せ
溜息をつくばかり　しばさまぢハ　お園ハ　涙の　情なれバ
親　ハ　まけども　気味　悪く　是を　見まハ　ぢう　判
さんなぢう　怖ハ　ハト　ハ　様ぢう　様頼の　外ハ　分の　音ら

ねどがタ〳〵ガコアリ　と寄きこそれバ猫寄き「ア」
エリ　と泣変ふり判次郎ふ　ちぐ〳〵分き色青ざろて
身を振ハー　痛くあぐる　時の陳子の外ゆそ　猫のいぐ〳〵
命ふ変ギャアリ　キナリ　ニヤア　判「ゆんぐちく〳〵やうちく猫ぐ
喧嘩をまるのぐちふぐ　ちの「ヨヤ〳〵　鉄久　宮ふ　モ〳〵　仏
猫よ　胸り　ちまー　ちらふアリ　怖ろこコレちろと　仏胸ふ
押ゆそ　ちふ　仏猫ふマア　動ふ　仕まんぐらふ　判「ドケく
ちの「アレサ　其所　ぐやア　ちんヨホ〳〵　ちアーしんヨ。ヨヤ　私ヤケ

ちと　ちこ　気が分ぐふ　居まー　ちん　仏猫せうふエ　判「ナラ〳〵
仏猫ーちのぐ　ちの「アノウ　眼鏡　素足で　ちん出ーて　来る　途中で
怪ふをーちそめで　ちふ　血が分て　居ちん　判「　ちろ　仕ーと
気ふ　ちる　ノウドレ　着せる　痛ふ　ちる　ちん　ちの「イエエ　ちこ
痛ケア　有ません　ヨ　判「　ちる　ちんば　ちんば　怪我をさせて
ちふ　ちん　大ちる　のお　猫ふ　ちん　ぐちト　ちふ　時ーも　隣家ふ　住
猫の　声ふ　ちの　「判　ちん　眼鏡　ハ　お答ちぬ　ぐぐぬ　ちまんふ　判「
イエエ　「ヨヤ　お　ちふ　ーぐちの　丁寧　人の　ちふ　ぐ　同え　ちまんよ

お園さん迄私の所へ来て懇情浅なるまじ。
私きやつ共今来まし〳〵と言ふ〳〵花衣判次郎の
顔を見て嬉しそうな姿へ金めも代新〳〵思ふべし

江戸作者　在訓亭　爲永春水

江戸画工　獨酔舎　歌川國直

春色梅美婦禰巻之十二了